

結果の概要

1. 栄養素等の摂取状況

1人1日当たりの栄養素等摂取量はほぼ適正

平成10年調査における国民1人1日当たりの栄養素等摂取量を調査対象の平均栄養所要量に対する充足率で見ると、図1のとおり、エネルギーはほぼ適正摂取となっており、カルシウムを除く栄養素については所要量を上回っている。また、栄養素等摂取量の年次推移は表1のとおりである。

図1 栄養素等摂取量と調査対象の平均栄養所要量との比較(調査対象の平均栄養所要量=100)

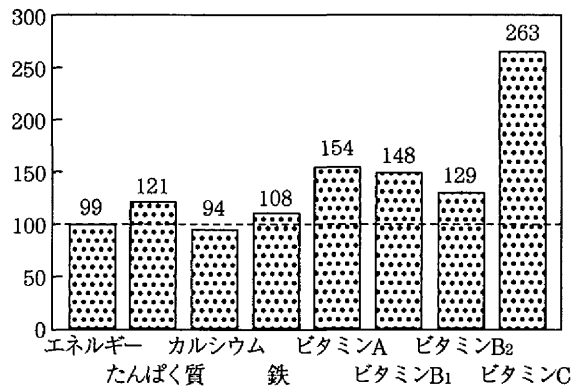


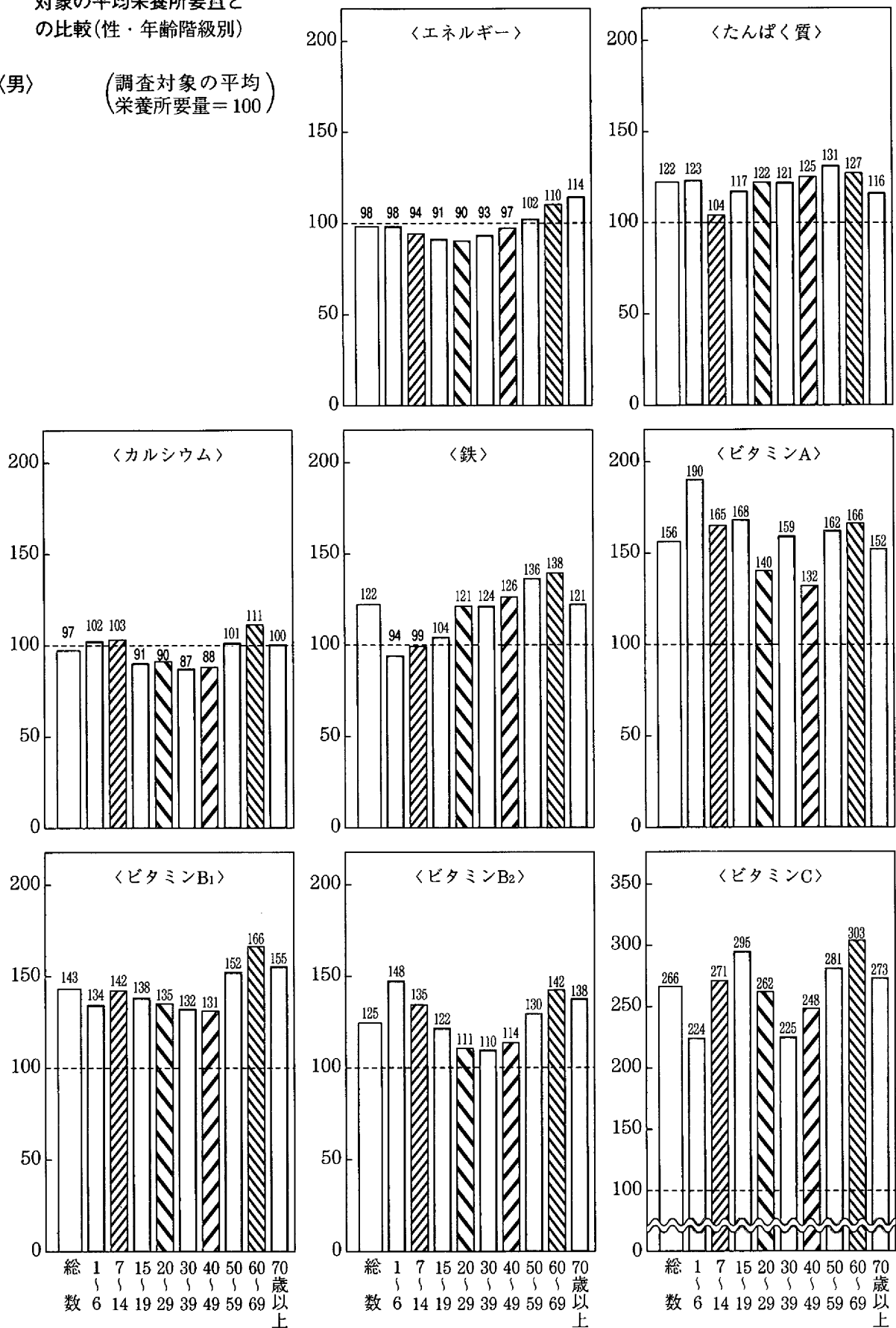
表1 栄養素等摂取量の年次推移

	昭和50年 (1975)	55年 (1980)	60年 (1985)	平成2年 (1990)	7年 (1995)	10年 (1998)	11年 (1999)	
エネルギー kcal	2,226	2,119	2,088	2,026	2,042	1,979	1,967	
たんぱく質 g	81.0	78.7	79.0	78.7	81.5	79.2	78.9	
うち動物性 g	38.9	39.2	40.1	41.4	44.4	42.8	42.3	
脂質 g	55.2	55.6	56.9	56.9	59.9	57.9	57.9	
うち動物性 g	26.2	26.9	27.6	27.5	29.8	29.2	29.0	
炭水化物 g	335	309	298	287	280	271	269	
カルシウム mg	552	539	553	531	585	568	575	
鉄 mg	10.8	10.4	10.8	11.1	11.8	11.4	11.5	
食塩(ナトリウム×2.54/1,000) g	13.5	12.9	12.1	12.5	13.2	12.7	12.6	
ビタミン	A IU	1,889	1,986	2,188	2,567	2,840	2,701	2,803
	B ₁ mg	1.39	1.37	1.34	1.23	1.22	1.16	1.18
	B ₂ mg	1.23	1.21	1.25	1.33	1.47	1.42	1.43
	C mg	138	123	128	120	135	125	129

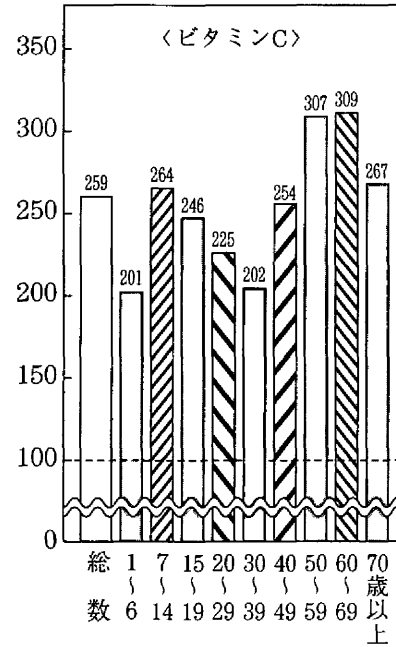
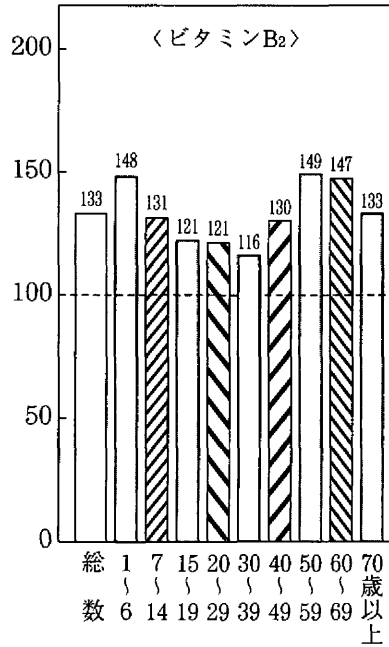
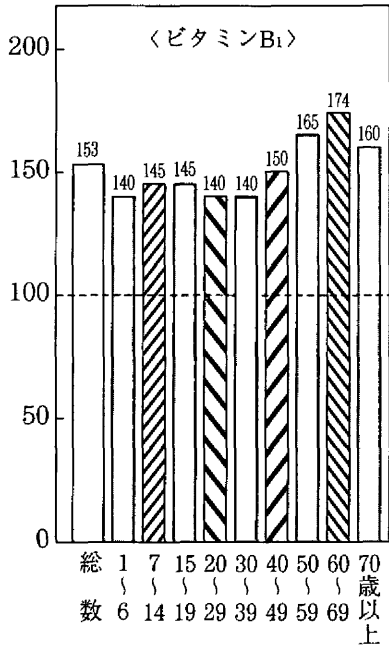
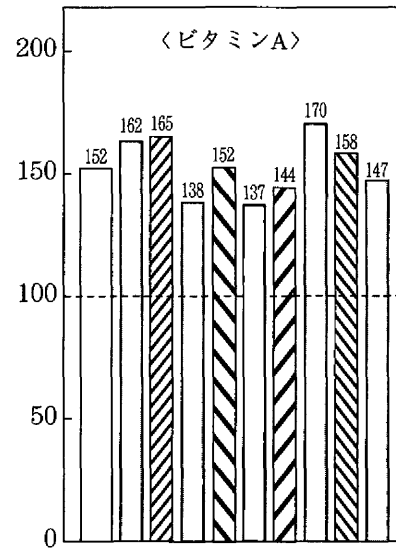
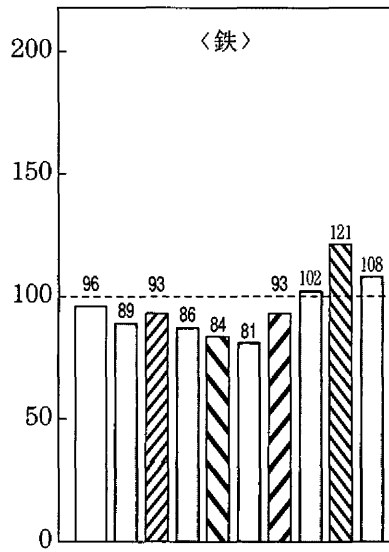
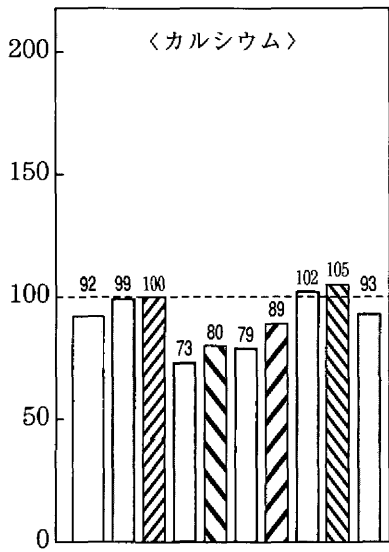
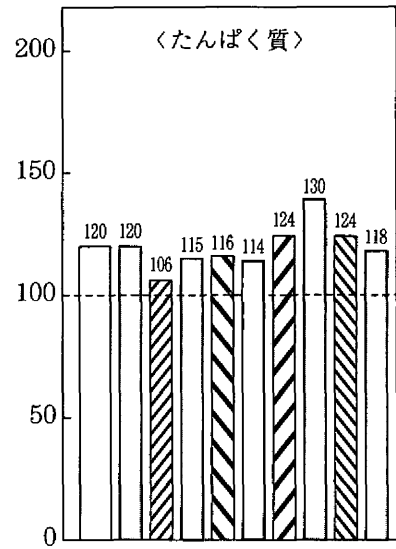
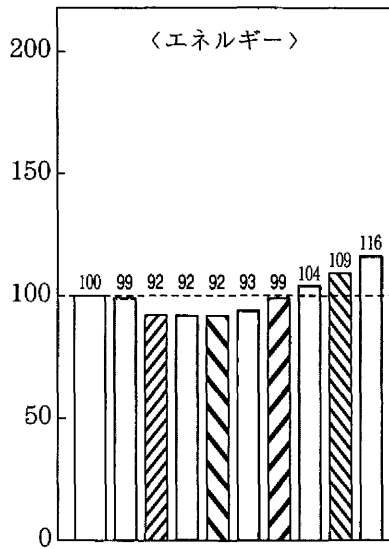
なお、性・年齢階級別で見ると図2のとおり、男性ではカルシウムが所要量を下回り、30歳代、40歳代では80%台の充足率にとどまっている。一方、女性ではカルシウム、鉄が所要量を下回り、カルシウムは15～19歳、30歳代で充足率70%台、鉄は15～19歳、20歳代、30歳代で充足率80%台と、摂取不足が見受けられる。

図2 栄養素等摂取量と調査対象の平均栄養所要量との比較(性・年齢階級別)

〈男〉 (調査対象の平均)
(栄養所要量=100)



〈女〉 (調査対象の平均)
(栄養所要量=100)



注) 太字は100%を下回るもの

エネルギー摂取量に占める脂質エネルギー比率は26.5%
特に20～40歳代では適正比率の25%を超えて高率

エネルギー摂取量は、平均で見るとほぼ適正量となっている。

摂取エネルギーに占めるたんぱく質、脂質、糖質の構成比は図3のとおり、昭和50年以降、減少傾向にあった糖質、増加傾向にあった脂質にやや歯止めがかかったが、依然として脂質エネルギー比率は適正比率を超えている。特に、年齢階級別にみると図4のとおり、20～40歳代では脂質エネルギーは適正比率の25%を超えて高率である。脂質の過剰摂取は肥満や高脂血症ばかりでなく、心臓病や大腸がんなどの一因ともなり、生活習慣病予防の観点から注意を払うべき問題である。

図3 エネルギーの栄養素別摂取構成比（年次推移）

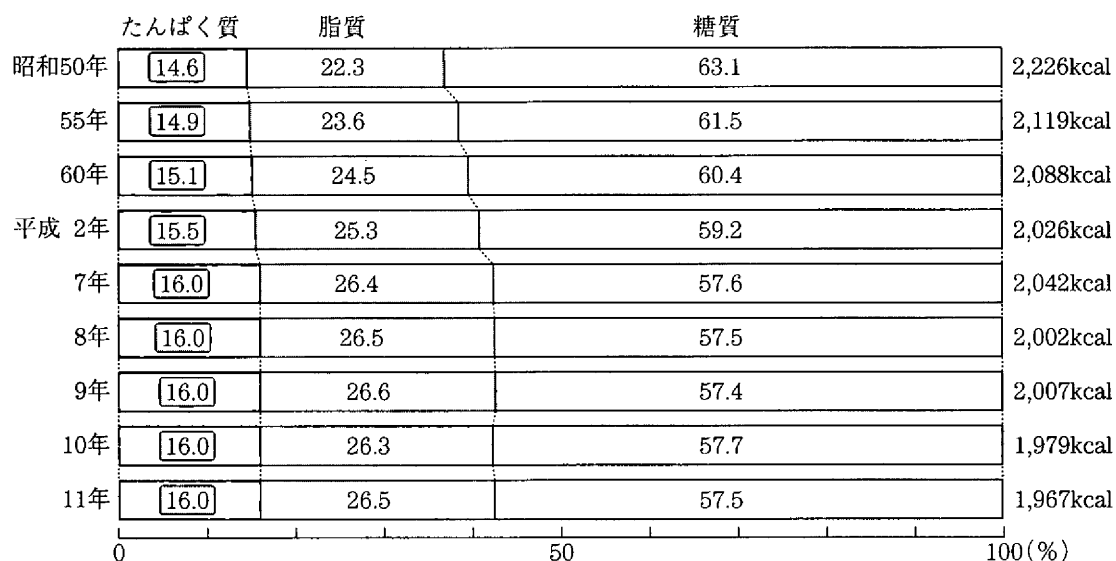
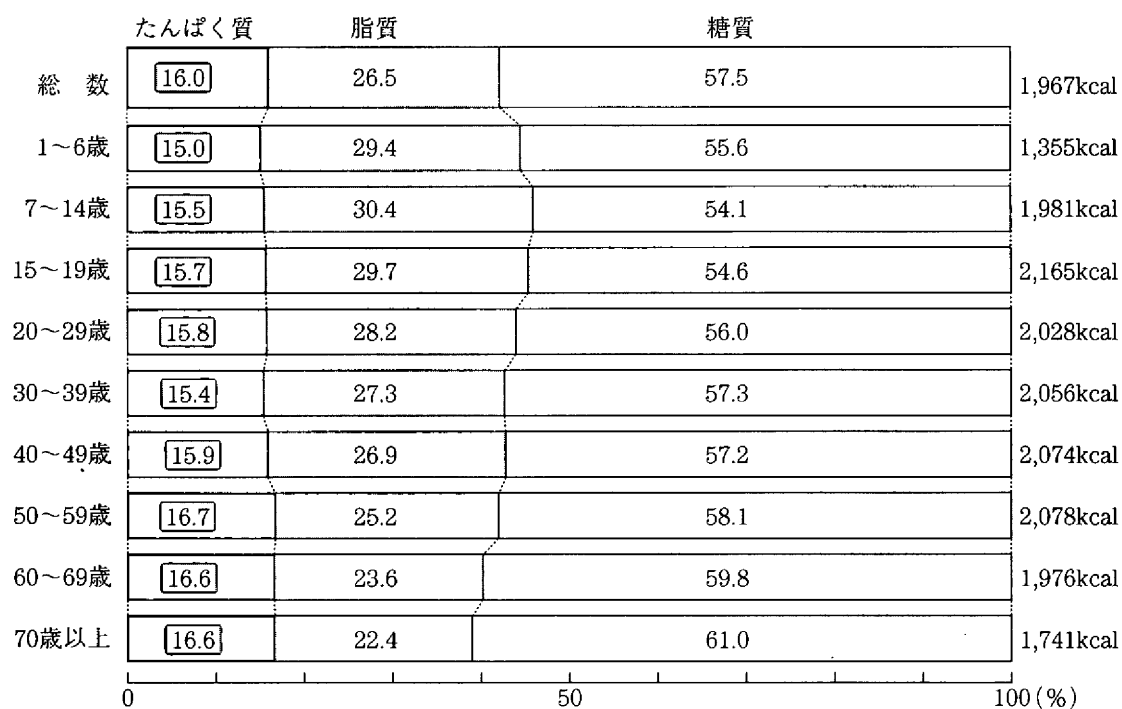


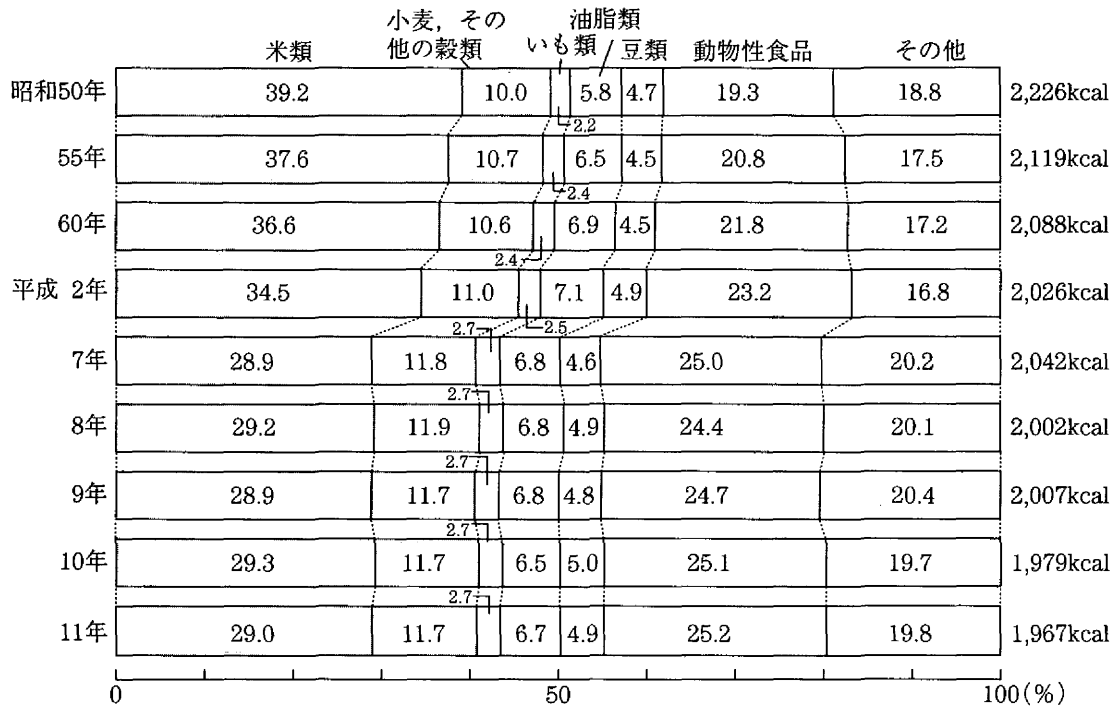
図4 エネルギーの栄養素別摂取構成比（年齢階級別）



穀類エネルギー比は減少傾向、特に米類からの摂取が減少

エネルギーの食品群別摂取構成比の年次推移をみると、図5のとおり、穀類エネルギー比は昭和50年の49.2%から、平成11年では40.7%にまで減少している。特に米類の減少が著しく、同じく39.2%に対し、29.0%にまで減少している。主食としての穀類を毎食適量摂取することは、糖質エネルギー比を適正に維持し、脂質エネルギー比の増加を防ぐことにもつながる。

図5 エネルギーの食品群別摂取構成比



動物、植物、魚類由来の脂質の摂取割合は4：5：1

脂質の摂取量は、図6のとおり、昭和50年の55.2gから平成11年では57.9gになっている。脂質摂取に関しては、動物、植物、魚類には異なった種類の脂肪酸が含まれており、これらの食品をバランスよくとることが望ましいといわれている。平成11年では、動物、植物、魚類由来の脂質の摂取割合は4：5：1となっている。

脂質の食品群別摂取構成比の年次推移をみると、図7のとおり、昭和50年に比べると穀類からの摂取が減少し、肉類や乳類からの摂取が増加しているが、近年では横ばいである。

図6 油脂摂取量の年次推移

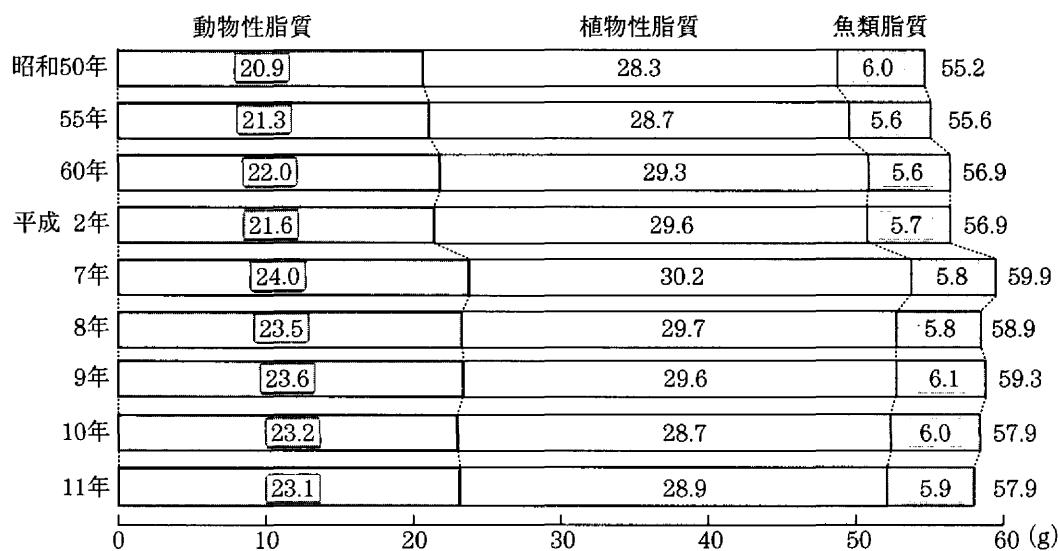
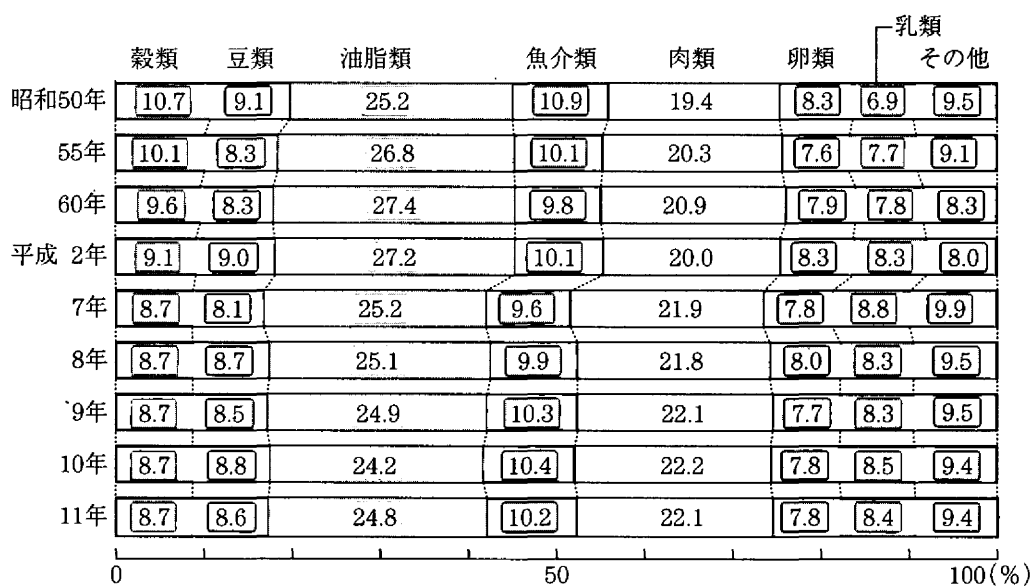


図7 脂質の食品群別摂取構成比



たんぱく質の総摂取量は横ばいだが、動物性たんぱく質は増加傾向

たんぱく質摂取量の年次推移をみると、図8のとおり、昭和50年以降、総摂取量は80g前後と増減はみられない。一方、動物性たんぱく質の摂取量は昭和50年の38.9gから平成11年では42.3gとなり、動物性たんぱく質比は図中折れ線グラフで示すとおり、昭和50年の48.0%から平成11年では53.6%と増加している。

たんぱく質の食品群別摂取構成比の年次推移をみると、図9のとおり、穀類からの摂取が減少傾向にあり、特に米類からの摂取は昭和50年の20.6%から平成11年では13.8%にまで減少している。

図8 たんぱく質摂取量の年次推移

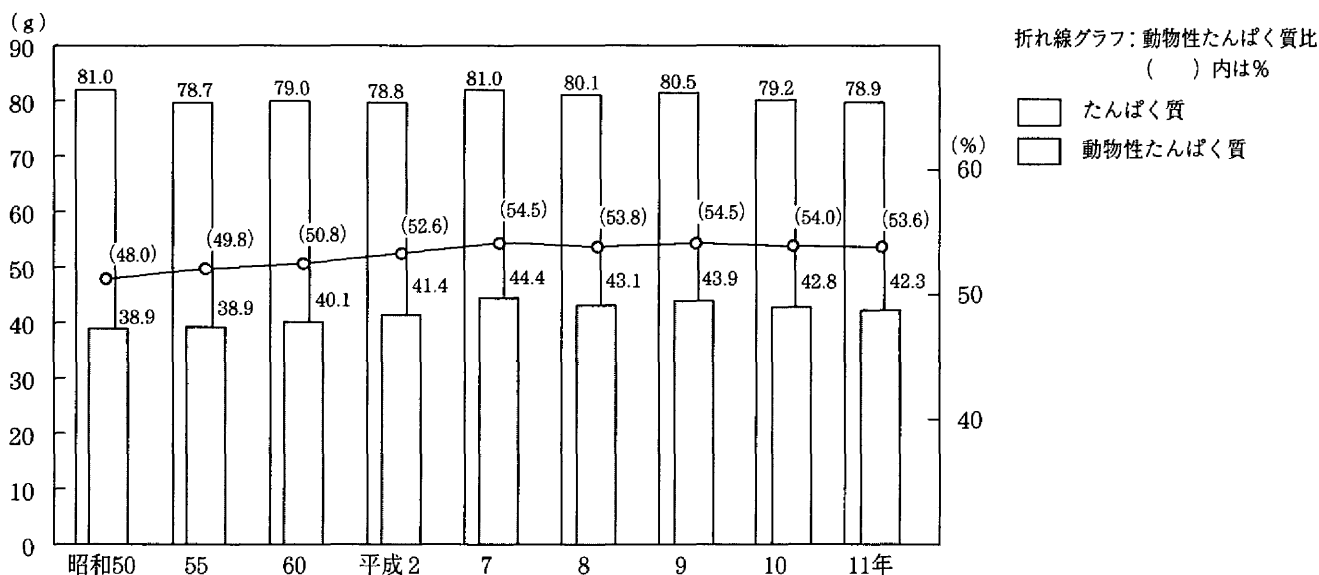
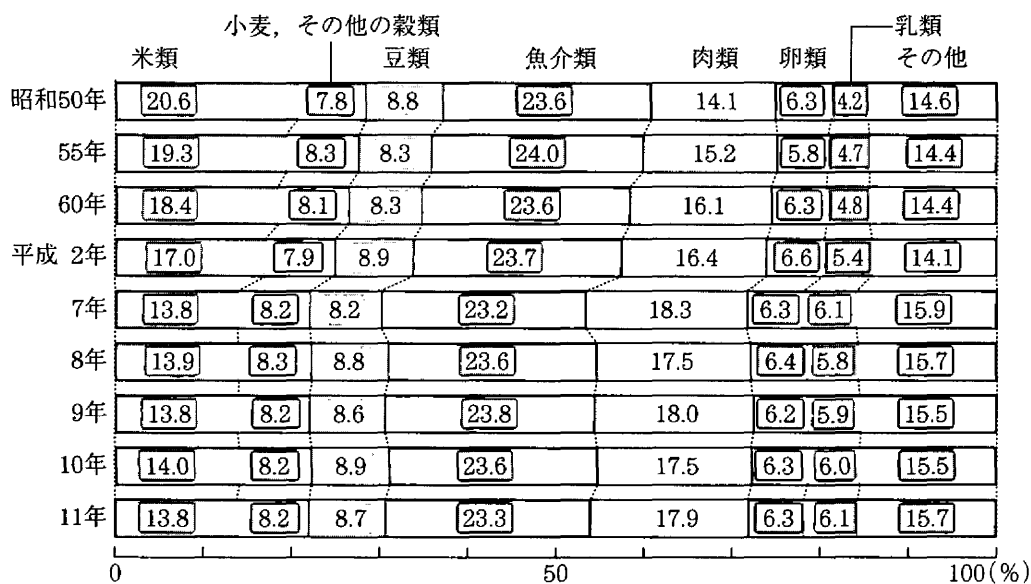


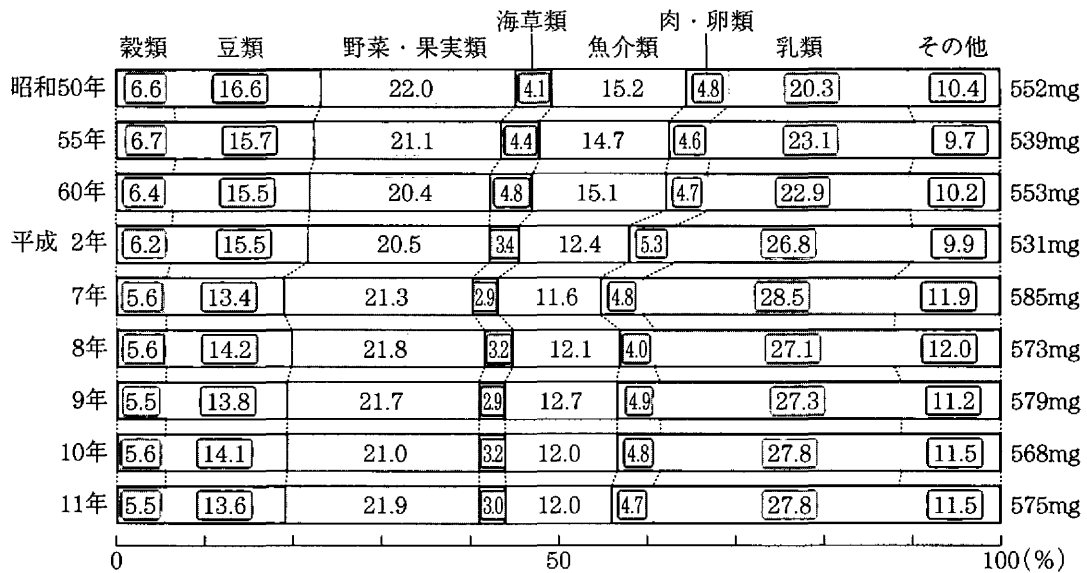
図9 たんぱく質の食品群別摂取構成比



カルシウムの摂取を食品群別摂取構成比で見ると、乳類からの摂取は増加傾向

カルシウムの食品群別摂取構成比の年次推移をみると、図10のとおり、乳類からの摂取は増加しているが、魚介類からの摂取は減少している。カルシウムの摂取量は依然所要量を満たしていない状況にあるので、乳類をはじめ、小魚や海草、緑黄色野菜、豆類などの摂取に心がけ、カルシウムの摂取増に努める必要がある。

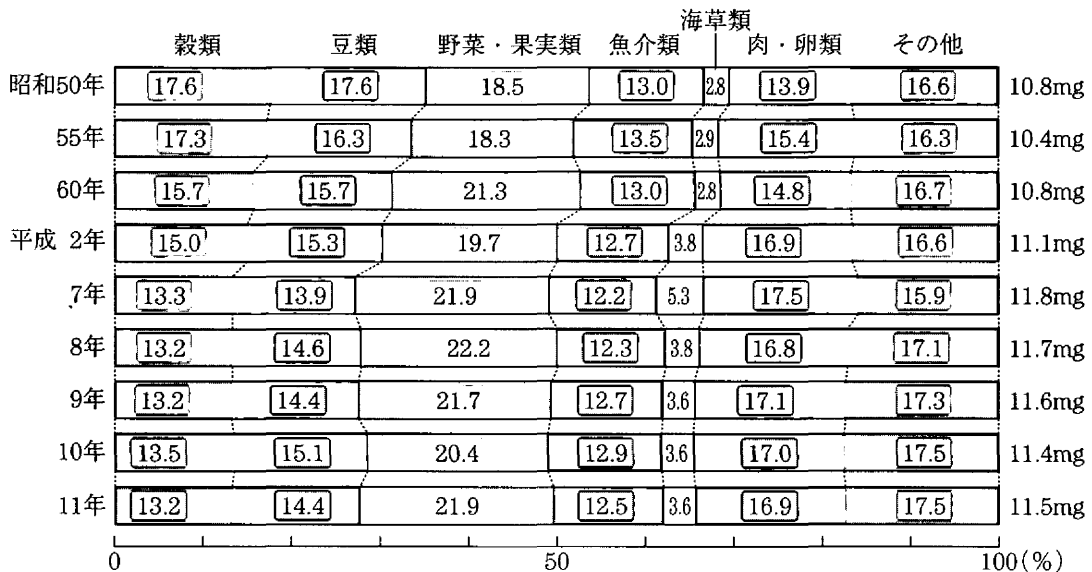
図10 カルシウムの食品群別摂取構成比



鉄の摂取を食品群別摂取構成比で見ると、穀類、豆類からの摂取は減少傾向

鉄の摂取量は昭和55年以降、わずかながら増加の傾向を示している。鉄の食品群別摂取構成比の年次推移をみると、図11のとおり、ここ数年は、いずれもほぼ横ばいである。

図11 鉄の食品群別摂取構成比



ビタミン類の摂取を食品群別摂取構成比で見ると、ビタミンB₁では米類からの摂取が減少、ビタミンCでは果実類からの摂取が減少傾向

ビタミン類の食品群別摂取構成比の年次推移をみると、図12～15のとおり、ビタミンAについては緑黄色野菜が5割前後を占めている。ビタミンB₁については米類からの摂取割合の減少が著しい。

図12 ビタミンAの食品群別摂取構成比

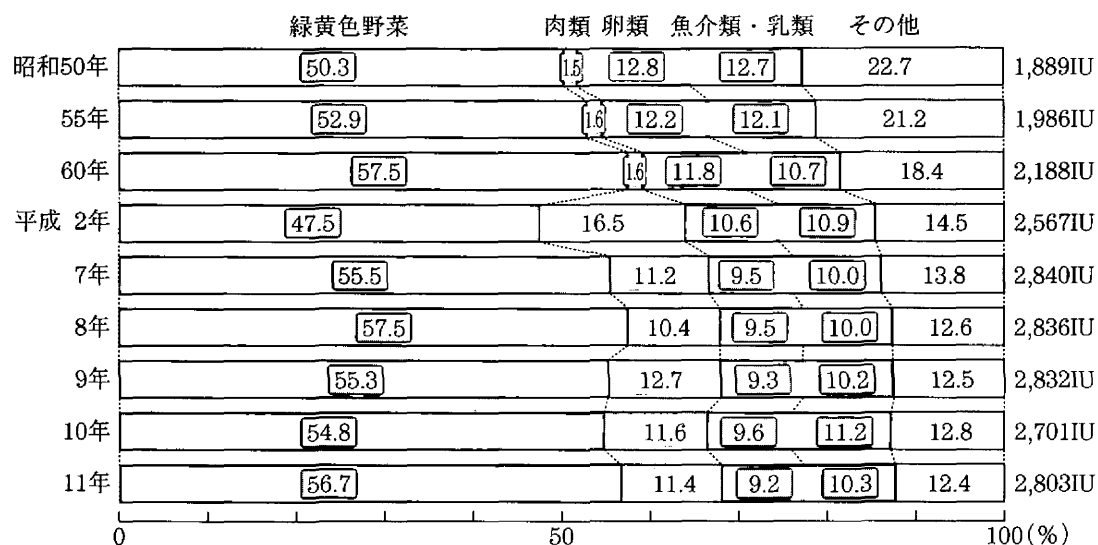
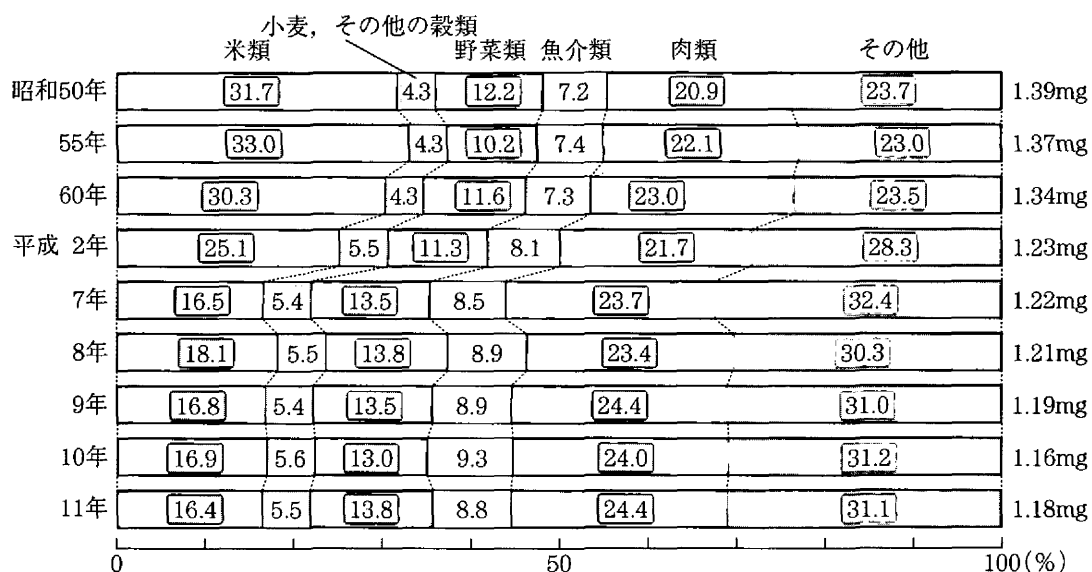


図13 ビタミンB₁の食品群別摂取構成比



ビタミンB₂については昭和50年以降、摂取割合にほとんど変化はみられない。ビタミンCについては果実類からの摂取割合の減少が著しく、その一方で緑黄色野菜からの摂取割合が増加している。

図14 ビタミンB₂の食品群別摂取構成比

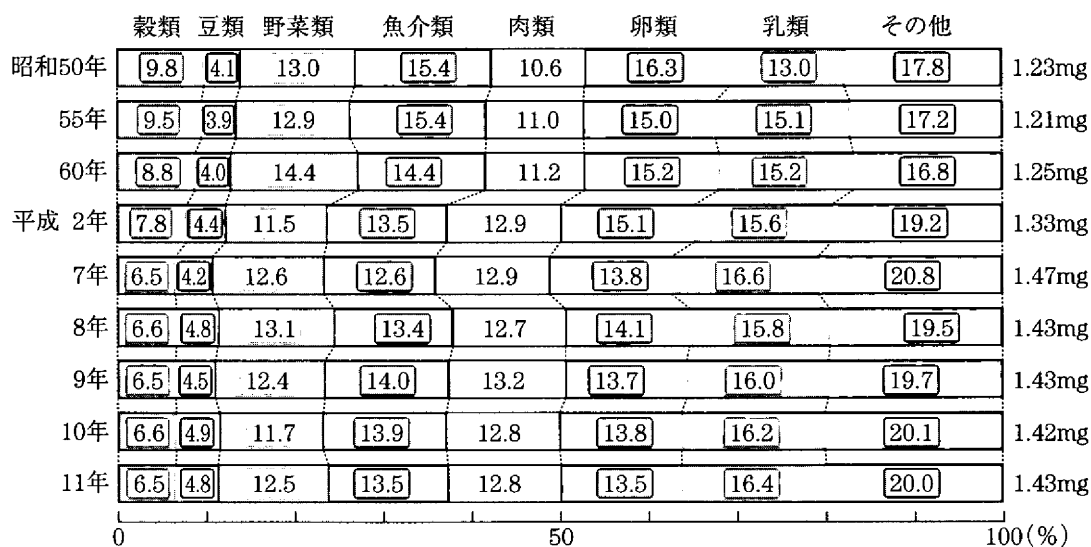


図15 ビタミンCの食品群別摂取構成比

